

# 環境教育人を訪ねて 第3回 永菅 裕一さん (棚田LOVER's)

## 一緒にシャイニング(輝こう)！ 棚田から学ぶ原風景と食文化

文：垂水 恵美子 (JEEF 職員)

抜けるような青空に向かって、緑色の段々が連なって見える。初めて見るのにどこか懐かしく感じるその光景は、私たちの心に焼き付いた棚田の美しい景色だ。ここは兵庫県市川町。懐かしい原風景に広がる棚田の保全活動を行っているのが、NPO法人棚田LOVER'sの「シャイニング棚田くん」こと、永菅裕一さん。未来の子どもたちにその景色と日本の食文化を残すことを目指し、年間60以上のイベントを実施している。

「お米をはじめとして、大豆、小麦なども育てて、味噌や納豆をつくるイベントもやっています」

永菅さんの朝は早い。7時には棚田に赴き、作物や田んぼの様子をライブ配信。4〜5枚ある田んぼの管理やイベントの準備、打合せ等々を済ませたあと、最近始めた民宿に宿泊されるイベントの参加者と夜遅くまで語らう。文字通り「朝か



はどこから生まれているのか。

「学生の時、農家の人に言われたんです。あと5年で棚田は消えてしまいうだろうと。それは嫌だ、この美しい地元の風景を守りたいと思って、活動を始めました」

この町と棚田の風景を愛していた永菅さんにとって、あと5年というリミットは衝撃だった。

棚田LOVER'sは、永菅さんが大学4年生の時、同じ大学の仲間と立ち上げた。現在は3〜4人のスタッフを中心に、実行委員を組むなどして地元の人たちと協力しながらイベントなどを運営して

いる。姫路、神戸、大阪から参加者を集め、これまでに12枚の棚田の再生に成功した。現在は毎週末のイベントに加え、約1000人が訪れる「棚田フェス」を開催するなどして、たくさんの方に農作業を通じて自然の美しさを体験していただいている。

「今後はホースセラピーや森のようちえんを始めることを検討しています。13年後には、世界棚田サミットを開催するのが目標です。棚田は日本だけでなく、世界の様々なところにあるので」

学生時代に団体を設立してから15年。永菅さんの挑戦は、まだまだ続いていく。活動について書かれた著書も出されたので、ぜひこちらも読んでみてほしい。



『棚田くへ行こう！』購入サイト  
<https://ulfk3.hp.peraichi.com/tanadakungaiku>